

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

つなぐ：水

福岡県

福岡教育大学附属福岡中学校

二年

宇野

誠洋

まるで昇り龍のようにその「水龍」は駆け上がってくる。福岡導水だ。大好きな祖父が住む久留米市を流れる筑後川の筑後大堰から私が暮らす福岡市の水瓶牛頸ダムに向けて、およそ二五キロの道のりを、上り八四メートルという高低差をもろともせず、文字通りかけハシ（八四m）となつて駆け上がる。

「水龍」は二カ所だけその姿を地上に現す。筑後平野を貫く九州自動車道を久留米へと疾走するとき、福岡都市圏の守り神であるその銀色に輝く胴体（水管橋）を見つけた瞬間、私はワクワクして誇らしい気持ちになる。

昨年私は筑後導水につながる何か所かの施設を見学した。桜満開の春に訪れた寺内ダムは、二〇一七年七月の九州北部豪雨において、水だけでなく大量の土砂や流木もせき止めた。限界水位まで五七センチに迫る中、筑後川に接続する佐田川を氾濫させまいと、朝倉・久留米の被害を最小限に抑えた。副所長さんに放流の判断の難しさをお聞きし、無事に守られた祖父母の分まで心から感謝した。

猛暑の夏に訪れた松原ダムは、雨不足で渇水だった。赤土がむき出しの湖岸を見て、毎年変わる気象状況下での水行政の難しさについて考えさせられた。大柄な所長さんに聞くと、一番大きな水門のクレストゲートは、点検以外で実際に開門した事が驚くことに一度もないらしい。渇水であっても、日頃からしっかりと準備することで初めて「いざというとき」に対処できると知った。

筑後川ダム統合管理事務所の指揮命令室には、スイッチや大型モニターがズラリと並び、リアルタイムで筑後大堰や複数のダムや観測地などが映し出されていた。専門的な天気予報図を分析しつつ、まさに統合的に筑後川を管理していることがわかった。

様々な学びの結果、最も印象に残ったのは（人）だった。水の現場では、日夜実直に水を守り、経験と知恵を駆使して判断し、複合的で緻密に水を管理し続ける人たちがいた。私たちが日々享受する安全で安心な

生活は、現場の人たちのたゆまぬ努力によって届けられていることを忘れてはならないと思った。

各施設の成り立ちをひもとけば、そこには必ず人々が苦悩した歴史がある。多くの犠牲者を出した昭和二八年の西日本大水害の教訓をもとに作られた筑後大堰や寺内ダムなどは、たびたび増水して暴れる筑後川を調節し、それ以降多くの市民の命を守ってきた。昭和五三年福岡大渇水の経験からも、悲願の水源としてつながれた福岡導水は、福岡都市圏二五〇万人の水の三分の一を日々送り届け、私たちの暮らしを支えてきた。人が悲しみに暮れる日も、灼熱の太陽が容赦なく照りつける日も……。人が今日まで積み重ねてきた数々の努力は着実に実を結んできたのだ。この恩恵を受ける私は、それら数々の設備を「誰のものでもない」ではなく「私のもので（も）ある」と考えたい。そうすることで、自分ごととして主体的に関わり、これからも感謝を忘れずに、水を大切に続けられると思うからだ。

十二月、久留米の大好きな祖父がガンで天国に旅立った。四季折々の彩りを見せる高良山に幼い頃から祖父とよく登った。筑後平野に横たわる筑後川がゆったりと有明海まで注ぐ。パノラマ風景は、祖父との大切な思い出だ。

闘病生活のある夏の日、私は透明で小さなコップに氷水を入れて、祖父に渡した。祖父はゆっくりと水を口に含み、「あーうまい、ありがとう。おだやかな笑顔で、そう言った。その瞬間のコップの水が透明で美しく、「私たちは生かされて生きている」のだという感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

今日も福岡導水は私に水をつないでくれる。祖父が眠る久留米から笑顔を運ぶように。毎朝その遺影に供える水は、あの日と変わらず美しい。命をつなぐ一滴の水。私は人の心を潤す一滴の水のような人になりたいと思う。